

## 2022.9.18 高齢者を覚える礼拝

### 聖霊降臨節第16主日礼拝（家庭礼拝の式順）

黙 祷

聖 書 ペトロの手紙I4章1-6節

説 教 「残りの生涯の歩み方」 牧師 三浦 啓

讃美歌 521「とらえたまえ、われらを」

献 金

黙 祷

今日は高齢者を覚える礼拝を皆さんと守りたいと思います。“高齢者”と言ってもはっきりとした年齢での分けはなく、何歳からが高齢者と呼ばれるのか定義はないそうです。日本では、65-74歳を“前期高齢者”、75歳以上を“後期高齢者”と呼んでいます。仮に、高齢者を65歳以上とするのであれば、どの教会でも高齢者がたくさん集っていることと思います。教会で“高齢者”という時に、その背景にいろいろな意味があるように思います。例えば、若い頃に洗礼を受けられた方にとって“高齢者”ということは信仰歴が長いことを意味します。また、肉体上の高齢者という意味においては、地上での歩みが終盤を迎えていることを意味します。私の両親も“高齢者”であるので、信仰面では尊敬し、肉体面では離れて暮らす両親のことを心配しています。

さて、今日の聖書箇所2節に「肉における残りの生涯」という言葉が出て来ました。簡単に言えば、地上で、この肉体、この命において生きる残りの生涯のことです。私たちは、何かの折、何かの節目等に、自分の残りの生涯を意識するでしょう。例えば、身近な人の死を通して、特に年配の方は、残りの生涯を意識するでしょう。還暦や古希、喜寿といった節目の年齢を迎えた時にも意識するかもしれません。仕事を定年退職して、生活のスタイルが変わる時、さて残りの生涯をどうやって生きていこうかと考えるでしょう。

ペトロの手紙が「肉における残りの生涯」と言うとき、どのような節目を意識しているかと言えば、それはキリスト教の洗礼だということです。今日の聖書箇所の直前の3章の終りで「洗礼」という言葉が2度出て来ました。洗礼とは簡単に言えば、キリストの犠牲によって罪を清められ、神と和解し、キリストと共に、一つになって生きる誓いを立てる儀式です。

今日の1節にも「キリストは肉に苦しみをお受けになった」とありました。キリストが私たちの罪のために苦しみを受け、私たちの罪を負って十字架にかかり、身代わりとなって“罪滅ぼし”をしてくださったのです。それによって私たち人間が神様と和解する道が開かれました。この救いの恵みを信じて、私たちは洗礼を受けます。そしてそこから、キリストと共に生きる「残りの生涯」が始まるのです。

洗礼によって新しく始まる「残りの生涯」をどのように生きるか？洗礼を受け

ようと志す人は、まず洗礼とはどのようなものを理解しようとするでしょう。私も受洗準備会で、「洗礼とはこういうものですよ」、と説明をします。それはもちろん、間違いではありません。しかし、今日の聖書を黙想しながら、「私たちはむしろ、そこから始まる“残りの生涯”をどのように生きるか、という新たな生き方こそ考えるべきではないか、そちらの方が大事ではないか」とふと思いました。

ペトロの手紙は、洗礼を受けた者に、その残りの生涯において何を期待しているのでしょうか。2節にこう書かれています。

「それは、もはや人間の欲望にではなく神の御心に従って、肉における残りの生涯を生きるようになるためです」。

今までは「人間の欲望」、自分の欲望に従って生きて来た人間がいるとして、これからは「神の御心」に従って「残りの生涯を生きる」ことが期待されています。いや、私たち自身が、その志をもって洗礼を受け、残りの生涯を、神様の御心に従って生きる新しい生き方をしようとするのです。

人間の欲望に従う生き方がどのようなものか、3節に記されています。ペトロがこの手紙を書き送った教会のクリスチャンたちも、かつてはそうだったのです。

「かつてあなたがたは異邦人が好むようなことを行い、好色、情欲、泥酔、酒宴、暴飲、律法で禁じられている偶像礼拝などにふけていた……」。

ちょっと下品な言い方になりますが、いわゆる“金”“酒”“女”を求める欲望の生活です。

以前、元プロ野球選手の清原さんがドラッグに手を出して逮捕されました。かつてすばらしい活躍をし、成果を残し、金と名誉を手に入れた人だと思います。しかし、引退した後の残りの生涯を、清原さんはドラッグに染めてしまいました。金と名誉を手に入れて、家庭もあって、いったいどんな不満があるのかと思われるかも知れません。しかし、残りの生涯をどう生きるか、清原さんは、そこに確かな生き方を、救いの道を見いだすことができなかつたのです。そのために欲望の罪に手を染めてしまったのでしょう。

清原さんの姿は決して、私たちとは無関係だと言うことはできません。確かに私たちは、そんなにお金も名誉も、何も持っていないかも知れません。しかし、私たちもまた、自分の生涯に確かな生き方、救いの道を見いだせなければ、同じような「人間の欲望」に従う罪の生き方に陥るでしょう。犯罪に手を染めなくとも、周りの人を傷つけ、迷惑をかけ、人との関係を壊し、自分を壊しながら生きることになることだってあるのです。だから、私たちもまた、自分の人生に、神様の御心に従って生きる確かな道を見出し、歩むことが大事なのです。そう、放蕩息子のように、神様の御心に立ち帰って生きることが大事なのです。

ある説教集に、今日の3節に描かれている乱行に生きる人の姿は、イエス様

がお話になった「放蕩息子」のようだ、と書かれていました。確かに、その通りです。ルカによる福音書 15 章のたとえ話で語られている放蕩息子は、父親の財産を生前贈与させ、それらをすべて金に換え、遠くに旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、すべてを失います。その放蕩とはまさに、「好色、情欲、泥酔、酒宴、暴飲、律法で禁じられている偶像礼拝など」だったでしょう。しかし、彼はそこで我に返ります。見栄を張らず、父親のもとに帰って謝ろう。そして、息子ではなく雇い人として遇してもらえるように頼んでみよう。そのように悔い改めて帰って来た息子を、父親は、もちろん追い出さず、走り寄って迎え、よく帰って来たを抱き締めて、責めず、罰しめせず、喜び祝って、以前と変わらぬ息子として遇したというたとえ話です。父と子が和解したのです。

このたとえは、神様と私たち人間の和解をたどったものです。私たちが、自分の欲望に従った生き方を悔い改めて、神様のもとに立ち帰るなら、神様の御心に従って生きようとするなら、神様は、賠償するとか、罰を受けるとか、そういったことは一切なしに、私たちを受け入れてくださるのです。神様と共に生きる生涯に生かしてくださるのです。神様に造られた私たちと神様との関係は元々、そういうものなのです。この救いの無条件を表わしているのがキリストの十字架です。キリストが十字架の上で苦しまれ、私たちに代わって罪滅ぼしをしてくださったということは、別の言い方をすれば、私たちの救いは無条件だということです。罰も償いもない。虫の良すぎる話のようですが、それが神様と私たちの霊的な関係なのです。

だからこそ、残りの生涯をどう生きるかが大事なのです。言わば“神の愛”を無条件でいただいた者としてどう生きるか、です。神様と和解するということは、何か悪いことをして、謝って、仲直りするということだけではありません。神様と自分の関係が壊れている。それをどのように、あるべき関係に回復するか、です。自分の欲望に従い、自己中心に、神様の愛など忘れて生きてしまう私たちが、神様の愛に気づいて、受け入れ、神様の御心に従う生き方を歩み始めるか。それが、神様との和解ということなのです。

では「神の御心」とは何でしょうか？今日の御言葉に書いてあります。キリストが肉に苦しみをお受けになったように、私たちも肉に苦しみを受けること。「肉に苦しみを受けた者」になるということです。自分の残りの生涯において、何らかの苦しみに生きるのです。私は、それを“愛”に生きることだと考えています。キリストが十字架の上で苦しまれたのは、私たちに対する神様の愛を示し、神様の愛に生きるためでした。ならば、私たちも、神様を愛し、人を愛する生き方をすること、隣人を自分のように愛し、キリストが愛してくださったように互いに愛し合うことこそ、神様の御心に従うことだと思うのです。

そして、愛するということは、好き嫌いという感情の営みではありません。聖書が言う愛は、極めて理性的な思いであり、言葉、態度、行動です。相手を嫌い

でも愛することはできるのが、キリストの愛です。なので、愛する時には、忍耐があったり、痛みがあったり、自己犠牲があったり、何かをささげる献身があったり、得を捨て損をいとわぬ勇気が必要だったりします。だから、愛する者は、ある意味で“苦しむ者”なのです。

以前、テレビであるドキュメンタリー番組を観ました。そこには、3・11の東日本大震災の東北のその後を追いかけた様子が描かれていました。その中で、中学生だった時に福島で被災し、その後、地域でのボランティアに取り組み、地元福島の大学に進学した一人の女子学生の歩みが紹介されていました。その女子学生のまわりの友だちはみんな東京へ進学する中、彼女は地元への進学を決めました。福島と言えば、東京電力第一原子力発電所の事故により放射線の影響を受けた場所です。放射線の影響で住み慣れた町を離れた人も多くいますし、進学を機に福島県外へ出る若者も多くいる現状が番組で紹介されていました。その女子学生の就職する際に福島へ残るか、県外へ出て就職するかを悩む様子も描かれていましたが、その女子学生は福島で働くことを決めました。彼女が福島で働きことを決めた理由は、「苦しい方を選択した」ということでした。福島県外へ出て、放射線の数値的にも安全な場所へ移ることは健康的にも、精神的にも良いことはわかっている。それでも、生まれ育った場所で、大切な人との関わりを持ちながら生きたい、震災後に自分を支えてくれた地元の人たちの役に立ちたい、という思いを彼女は語っていました。先ほど述べた、愛する者、苦しむ者、という表現を思い浮かべた時、このドキュメンタリー番組で紹介されていた女子学生を思い浮かべたのです。

損得ではないと思います。自分も痛みを負いながら、愛に生きる生き方を、私たちが残りの生涯において送りたいと思います。それは愛の心構えで生きるということです。1節に「武装」という表現が出てきました。「武装」とはあまり快くない言葉ですが、ペトロは“愛の武装”をすることを考えていたのでしょうか。愛の心で自分の欲望と闘い、罪と闘い、神の御心を生きていくのです。「罪との関わりを絶った」などとは、とても言えないかも知れないですが、放蕩息子のよう悔い改めて、繰り返し神様の御心へと立ち帰り続けるのです。そういう生き方を、周りの人々は「不審に思い」、もしかしたら「そしる」こともあるかも知れません。けれども、私たちは、この信仰と生き方こそ「霊において生きるようになる」道、神様の救いへと至る道だと信じたいと思います。

「肉における残りの生涯」をどのように生きるのか、私たちは問われています。高齢者であれ、まだ若い人であれ、神様のお守りの中で残りの生涯が愛に根差したものの、キリスト教の信仰に土台を据えたものになればと願いますし、神様の祝福によって高齢者の方々が元気に教会に集う地上での歩みを送ることができますようにと祈り求めたいと思います。

(牧師 三浦 啓)